

【平成21年度大会企画より】

講演 「『枕草子』の性格」

0. はじめに

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、木越でございます。

平成九年に退官してからもう十年以上になりますが、このような機会にお呼びいただきまして大変うれしく存じております。みなさん方にお渡ししたレジュメも、さきほどご発表して下さった方々のレジュメに比べれば非常に雑駁なものでして、何か申し訳ない気持ちもいたします。またこの講演会は、先々回は薄井篤子先生から新宗教と現代社会との関連について、先回は山本良先生から政治小説と現代社会との関係について、というお話だったのですが、私が今回やるのは現代とは関係ありません。この点も申し訳なく思いますが、少しお話させていたいただきたいと思います。

埼玉大学名誉教授 木越 隆

一 「枕草子」の執筆事情

昨年は、「源氏物語千年紀」として「源氏物語」が非常にもてはやされていたましたが、この「源氏物語」と並ぶのが「枕草子」です。

「枕草子」のほうは「源氏物語」からみるとあまりボリュームはありませんし、少し軽く見られている傾向がありますが、どうして軽く見られているかということが今日のお話の要旨でございます。

この「枕草子」がどういう風にして書かれたか、出来たかは、多くの方がご存じのように「枕草子」の一番最後にある跋文というか、後書きのようなものに書かれています。

この草子、目に見え心に思ふことを、人やは見むとすると
思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいな
う、人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、

よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

宮の御前に内の大臣の奉り給へりけるを、「これに何を書かまし。上の御前には『史記』といふ書を書かせ給へる」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申ししかば、「さば、得てよ」とて賜はせたりしを、…(略)…。

おほかたこれは、世の中のをかしきこと、人のめでたしなと思ふべきこと選り出でて、歌などをも、木・草・鳥・虫をも、いひ出だしたらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられめ、ただ心一つに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、…(略)…。

〔枕草子・第三一九段〕(1)より

これは要点だけ抜粋しましたから短くなっております。

まず最初の段落の傍線部分の「この草子、目に見え心に思ふことを」「つれづれなる里居のほどに書き集めたるを」というところは「枕草子」の性格という点で大切であります。

「源氏物語」といえば紫式部、「枕草子」といえば清少納言というように、二人は大体同じくらいの時代にいましたが、その頃は文学でいえば物語の全盛期でした。現存の物語としては「竹取物語」、「宇津保物語」、「落窪物語」、そして「源氏物語」と成立していきました。

文学の実際の主流は和歌であり、それと並ぶのが物語であり、それと共に日記文学がありました。その当時であれば「和泉式部日記」などが有名です。紀貫之の書きました「土佐日記」、

その後、道綱母の「蜻蛉日記」、そして「和泉式部日記」があります。

物語というのは実際のことをいいますと、「ものを語る」から物語というわけでございます。では「もの」というのは何かといいますと、現実にはない、人間以外の「もの」を「もの」というのであって、現実にはない「もの」を主人公として書くのです。一番わかりやすいのは「竹取物語」のかぐや姫です。竹の中から出て来たり、最後には天に昇ってしまうことは現実にはないことです。ですから物語は軽く言いますと虚構の世界、または架空の世界、もつと簡単にいえば嘘の世界であるわけです。

それから日記の方も「土佐日記」も冒頭から「男もすなる日記というものを女もしてみんとてするなり」と紀貫之が女性になつて書き、「蜻蛉日記」にしましても、「和泉式部日記」にしましても、必ずしも正確な記録ではありません。要するに自分を主人公にして描かれた物語、小説、今という私小説みたいなものが日記でした。今われわれがいう実録的な日記としては、「枕草子」の少しあとに書かれた「紫式部日記」がそれにあたります。

ということとは、「枕草子」が、「目に見え心に思ふ」ことを「書き集める」ということは、事実を書くということとして、決して虚構を書くというわけではないのです。こここの部分が「枕草子」の反物語・反日記文学性を示しています。

それではどのような過程を経て、「枕草子」ができたかとい

うのがその次であります。

清少納言が仕えていた一条天皇のお后である中宮定子の兄にあたる内大臣の伊周という者が、いわゆる草子、今でいうノートみたいなものを定子に差し上げました。次の傍線部分に「これに何を書かまし。上の御前には史記といふ書を書かせ給へる」と中宮が言つて、草子の一部が清少納言に与えられた、とあります。もし中宮定子が清少納言に草子を与えなければ、現在「枕草子」は存在しなかったかもしれません。

それでは次に何を書こうかというのは、三番目の段落の傍線部分の「歌などをも、木・草・鳥・虫をも、いひ出したらばこそ」というところで、このもらった草子に木・草・鳥・虫などについて和歌を書いたなら、「思ふほどよりはわろし」とあるように、清少納言は歌が下手と言われたり、あなたの歌の程度がわかるわと馬鹿にされるので書かない、とあります。

当時、ある程度教養があり、文学を解する女性であれば、紙をもらったらいいて和歌を書くと思います。文学的能力があり紙を多く貰えれば、物語や日記を書くかもしれません。しかし、彼女は物語や日記、和歌を書かないとしていたので、今日、われわれがみる「枕草子」のような体裁になってしまったのです。

これが「枕草子」成立事情の一つであります。

二. 自然と和歌

この当時どのような和歌が価値が高いかというと、自然を詠む和歌が価値が高いということが勅撰和歌集から分かります。

勅撰集の編纂を見ると、一番最初の部立は春夏秋冬、つまり四季の歌です。「古今集」でいえば最初に四季の歌、次に賀の歌、離別の歌、旅の羈旅の歌、その後恋の歌となっています。これは価値の高い歌の順に従って並べてあるのです。つまり、恋よりも四季の自然を詠む歌が価値の高い歌とされていたのです。

ですから、清少納言は散文で四季など自然の状況を書こうと思っていたようであります。なので、「木の花はくく」「鳥はくく」といった文章となりました。

三. 自然と「枕草子」

芭蕉の俳句といえば「古池や 蛙飛び込む 水の音」が思い起こされると思いますが、「枕草子」では、多くの人が「春はあけぼの」という文章を思い起こすと思います。その文章は要するに「春はあけぼの」「夏は夜」「秋は夕暮」「冬はつとめて」というように、四季が描かれているということになります。勅撰和歌集でいえば、一番重要な部分を散文で描いているということになるわけです。これが「枕草子」の中で一番象徴する文章であるところ、次の「参考」をみてください。「枕草子」の伝本は、この二系統四本に分かれています。

＊参考：雑纂系統―三卷本・能因本（伝能因所持本）

類纂系統―前田本・堺本

この四本ともに「春はあけぼの」から始まっています。

「枕草子」の中には色々な文章がありますが、大きく三つに分かれます。一つめは随筆的と言われるような「随想的章段」、次に「鳥はくく」「山は小倉山、かせ山、三笠山」といったように様々な事柄を種類によつて集めたもので「類聚的章段」、最後に自分が中宮定子に出仕していたときに、どのように待遇してもらえたか、どういった殿上人とどのような歌を詠み交わしたかという「日記的章段」という三つの種類の文章によつて構成されています。

われわれが普通に読む「枕草子」にはこの三つの章段がめちやくちやに並んでいます。めちやくちやというのは、統制もなく、日記的章段の次にいきなり類聚的章段が出て来たかと思うと、その次に再び日記的章段が出てきて、それから随想的章段が出てきて、更に類聚的章段が出てくるというものです。そういうものを、「参考」の右側に書きました「雑纂」と言います。要するに、雑然と集めたというので、「雑纂系統」の本と言います。今日われわれが普通に読んでいる系統の本です。そこには二つの本があつて、三巻本という本、それから能因本―これは平安時代の歌詠みの能因法師という人が持っていたということから能因本というのですけれども―という、二つの本文があつて、いま皆さん方が教科書で読んだり、いろいろな日本古典文学全集などでわれわれが読むのは、この三巻本が普通です。

ところがそれと違って、類聚的章段だけを続けて並べていつて、そのあとに随想的章段を並べて、それから最後に日記的章段だけを並べていくという、ちゃんとその内容によつてはつきりと分類して書かれているのがあります。それが、参考の左側

の「類纂系統」です。類纂というのは種類によつてまとめて集めているということです。そこには前田本と、堺本という二本があります。

さて、その四つのテキストですが、三巻本でも能因本でも前田本でも堺本でも、どのテキストでも一番最初に出てくるのが、次にあげた「春はあけぼの」の文章なのであります。

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく、山ぎは、少しあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏はよる。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとして、みつよつ、ふたつみつなどどびいそぐさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音、むしのねなど、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし

（「第一段」）

ということとは、どの本もこの「春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎは云々」というこの章段が、一番「枕草子」

的な、「枕草子」を象徴する文章であると考えていたということになります。ですから結局「枕草子」の本質は、散文によって四季の自然を描いていく、そういう本なのだと、昔の人も思っていたと考えていいのではないか、と思うわけです。

さて、その類聚的章段の一つの例が、次の「木の花は」であります。

木の花は、こきもうすきも紅梅。桜は、花びらおほきに、葉の色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の花は、しなひながく、色こく咲きたる、いとめでたし。

四月のつごもり、五月のついたちの頃ほひ、橘の葉のこくあをきに、花のいとしろく咲きたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花のなかよりこがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたるあさぼらけの桜におとらず。ほととぎすのよすがとさへおもへばにや、なほさらにいふべうもあらず。

梨の花、よにすさまじきものにして、ちかうもてなさず。

（「第三七段」より抜粋）

「木の花は」というのは、これは花の咲く木のことです。ですから文中に書いてあるように、梅であるとか桜であるとか、夏であれば橘であるとか、そういうのが「木の花」というものになります。こういうのも類聚的な章段のひとつのかたちです。そして、ここで注意することは、傍線部分を含むところの、夏

の橘の花についての説明の文章です。そこを読んで参りますと「四月のつごもり、五月のついたちの頃ほひ、橘の葉のこくあをきに、花のいとしろく咲きたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花のなかよりこがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど」というふうに書いてあります。しかし、なぜ急にこのところに「花のなかのこがね」などが出てくるのか。「花」の話をしているのに急に「実」の話が出てきていることです。

それはどうしてかというと、実際にこういう状況を彼女が見たのかもしれない。しかし、むしろそれよりも、次にあげました漢詩句と関わっているものと思われまます。

枝ニハ金鈴ヲ繫ケタリ 春ノ雨ノ後

花ニハ紫麝しじやヲ薫ズ 凱風がいふうノ程

後中書王（具平親王）「花橘」『和漢朗詠集』

「後中書王」の中書王というのは中務卿という役職の皇族名で、村上天皇の皇子である具平親王という方のことですが、その方が作られた詩です。

書き下し文にありますが「枝には金鈴を繫けたり、春の雨の後。花には紫麝を薫ず、凱風の程」とあります。枝には「金鈴」——これは実ですけれども——がなっているとあります。「春の雨の後」というのは、「夏になった」ということです。夏になって雨が降った時には、金の鈴のような実がついている、ということ。そして「紫麝」というのは麝香という香りで、麝香

の香りがする。「凱風」というのは南風のことです。夏の南風が吹くときに花が香っている、という内容の詩句です。

つまり、「枕草子」では、「木の花」を書いているうちに「枝には金鈴を繫けたり」というこの詩句を思い出した、というか、この詩句をもとにして「花の中のこがねの玉かと見えて」という詩句を入れているのではないか。実際の状況を見ながらも、それに関連のある、価値のある詩文のようなものを入れて文章を作る、という書き方をしていると思うのです。

これに似たのがその次の第百段です。

職におはします頃、八月十よ日の月あかき夜、右近の内侍に琵琶ひかせて、端ちかくおはします。これかれものいひ、わらひなどするに、廂の柱によりかかりて、物もいはでさぶらへば、「など、かう音もせぬ。ものいへ。さうざうしきに」と仰せらるれば、「ただ秋の月の心を見侍るなり」と申せば、「さもないひつべし」と仰せらる。

（「第一〇〇段」より）

これは、清少納言が中宮のお側にいる時の話です。女房の一人であります右近の内侍というのが琵琶を弾いてます。そしていろいろな話をみんながしているけれども、清少納言はなんにも言わずに柱によりかかっている。すると、中宮が「どうしてお前は話をしないのか話をしなさい、寂しいよと」おっしゃる。そこで、「ただ秋の月の心を見侍るなり」というふうに答えた

というのです。「なにか話をしろ」と言われたのですから、世間話でもすればいいのに、「ただ秋の月の心を見侍るなり」という答え方をしているわけです。これは要するに、「友達が琵琶を弾いている。自分は何も言わない」という状況ですが、清少納言がここからすぐになにを思い出すかというと、次にあげた、白楽天の『白氏文集』の中にある「琵琶行」という詩の一部であります。

曲終リテ 撥ヲ収メ 心ニ当テテ画ク
四絃一声 裂帛ノ如シ
東船 西舫 悄トシテ言無シ
唯見ル 江心ニ 秋月ノ白キヲ

白 楽天「琵琶行」『白氏文集』

これは白楽天が揚子江のあたりを治める役人になっていた時に、夜に船に乗っておりますと、琵琶を弾いている女の人がいた、その人のことを詠んだ詩であります。

「曲終りて撥を収め」、これは弾いている女の人のことです。一曲弾いて撥を収めた。「収め」というのは「しまつて」ではなく、「引き寄せて」です。「心」は「胸」です。「胸にあてて」ですから、胸のあたりで撥を回していた。そうしていきなり、「四絃一声」というのは、琵琶は四絃ですからその四絃同時に弾きおろした。「裂帛」というのは「絹を裂く」ということです。よく女性の悲鳴のことを絹を裂くような悲鳴という言い方がありますけれども、それと同じように「絹を裂くのも同じである」ように撥

でひと払いをしたのです。そうするとそのそばの、東にいる船も西にいる船も、「悄として言無し」というのは「静かに言葉なし」ですから、だれも声を出さない、その琵琶の音に感動して誰も何も言わない。最後の句の「江心」というのは「揚子江の中心」で、そこに月が映っているのです。人々はただ、その秋の月の白いのを見ている、ということ詠んだ詩です。

つまり清少納言は、この「琵琶行」の引用した最後のところを用いて、「ただ秋の月の心を見侍るなり」という言い方をしたのでです。ということはこういうことであるかと申しますと、清少納言が自分がそのように言えば、中宮定子はちゃんと理解をしてくださる、それが誰のどういう詩であるのかということがすぐにお分かりになる、と考えてこういう言い方をしているのです。

ですから、結局「枕草子」というのは、誰に見せようとして書かれたかといいますと、こういう聡明な中宮定子に見ていたかどうかということが大きな目的、第一の目的であると考えられます。こういうことを書いても中宮定子はすぐおわかりになると、そういう気持ちで書いていたとうことになるかと思うのです。

四、雑纂系統の成立

そこで、「中宮定子にお見せする」ということが、私としては雑纂系統というばらばらな並び方というものが出てくるひとつの原因ではないかと思っています。と申しますのは、「枕草子」というのは清少納言が作ったということはあたりまえのことです。

すけれども、今日見るように、雑纂系統のような並べ方をしたのも、清少納言がそういう並べ方をしたのだろうと、一般的には考えられています。

萩谷朴先生という、もうお亡くなりになりましたが、非常に優れた国文学者がおられました。この先生の「枕草子」で、皆さん方が見やすいのは、新潮社から「日本古典集成」というシリーズが出されております『枕草子』二巻です。この先生は、「枕草子」を今見るような順番に並べたのは、清少納言自身が並べたのだと言っておられます。それは何による並べ方かというと「連想」だということです。ここに第何段というのがある、その何段の内容からの連想によつて次の段を並べる、それから、その次の段の言葉であるとかまたは事情であるとかそういうものの連想で更に次の段が並ぶ、というふうに萩谷先生は考えておられるのです。

しかし、私にはこじつけだという感じがいたします。それに対し岩波の新しい「新日本古典文学大系」に渡辺実という先生が、注や解説等を書いておいでになります。その先生の解説(2)によると、先ほども申しましたように「枕草子」というのは中宮定子にお見せするのがその目的であるとされています。だけれども、見せるといっても全部つくりあげて―三百二十段くらいありますけれども―、完成してからお見せするのではなく、書き上げたものから少しずつお渡ししていったのではないかと、と言われるのです。私もそういうふうな気持ちを持っています。

その一つの拠り所というのが、第二七七段であります。

二日ばかりありて、赤衣着たる男、畳を持て来て、「これ」といふ。「あれは誰ぞ。あらはなり」など、ものはしたなくいへば、さし置きて往ぬ。「いづこよりぞ」と問はすれど、「まかりにけり」ととり入れたれば、ことさらに御座といふ畳のさまにて、高麗など、いときよらなり。心のうちには、さにやあらんなど思へど、なほおぼつかなさ、人々いだしで求むれど、失せにけり。…(略)…

二日ばかり音もせねば、うたがひなくて、右京の君のもとに、「かかることなんある。さることやけしき見給ひし。忍びてありさまのたまへ。さること見えずは、かう申したりとな散らし給ひそ」といひやりたるに、「いみじう隠させ給ひし事なり。ゆめゆめまろが聞こえたと、な口にも」とあれば、さればよと思ふむしろ、をかしうて、文を書きて、またみそかに御前の勾欄におかせしものは、まどひけるほどに、やがてかけ落して、御階の下に落ちにけり。

〔第二七七段〕より抜粋

この段の前の部分に、清少納言が、「私はどんなに悩んでいる時、つまらない時でも、きれいな白い紙をいただいたり、または座するためのきれいな畳―畳といっても実際は薄縁のことであつて今の畳みたいのではなく、莫蔭のようなもの―をいただいたら、どんな悩みでも吹っ飛んでしまう、楽しい気持ちになる」ということを、中宮さまがおられる前で言った。そうしたら中宮はそれを覚えていらつしやつて、あるとき紙を二十枚くらいくださつた、という話があります。

そして引用部分なのですが、しばらくしたら、赤い服を着た男が、赤い服というのは実際には身分が低い人ということを示しますが、身分が低い男がやってきて、きれいな薄縁というか莫蔭を自分の家に置いていつて、すぐにそのまま帰つて行つた。それで、誰がくれたのか何も分からない状態になつた。その後、中宮についている右京の君という友人に、これらは中宮さまがそういうふうにくださつたのだろう、要するに薄縁を贈つてくださつたのだろうと尋ねたところ、実際はそうなのだ、ということだつた。そこで、清少納言はお礼の手紙をどうしたかというのが、傍線部分であります。

「文(3)を書きて、またみそかに御前の勾欄におかせしものは」落つこちてしまつた、とあります。つまり清少納言は、中宮様の御殿の廊下、あるいは縁側みたいなところに自分の手紙を置いたわけです。それが落つこちてしまつたと言うのです。

つまり、清少納言と中宮との間の手紙のやりとりと申しますか、またはいろいろなもののやりとりは、正式に持つて行つて渡すというようなこともあつたかもしれませんが、非常に略式に、縁側のところに置いていくというやり方もあつたのだということが分かります。そして「枕草子」の各段も、そのようなかたちで、気軽く置いていったのではないか。そして中宮づきの女房たちがそれを集めていつて、そのまままとめていつたのが、今日の「枕草子」の形態になっているだろうと考えることができるのです。

そうすると、「枕草子」の全体構成も、結局はそれを書いた清少納言の気持ちではなく、誰か別の人たちがまとめていつた

ことになります。書いてある内容も、随想的なものもあれば、また類聚的なものもあれば、日記的なものもある。ですから、全体として何を書いてあるかよく分からないというものである、となつてまいります。

そうすると、どういう運命をたどるか。それが、次の第五番目の「作品の改変」というところであります。

五、作品の改変（添加・削除）

ある作品ができます。そしてその作品が、価値があるものだと考えられますと、あまりそれを変えろということはありません。たとえば「古今和歌集」で言えば、本によって少しは歌の出入りはあるかもしれませんが、だいたい千百首ぐらいある。千五百首ある「古今和歌集」や、五百首しかない「古今和歌集」などというのはありません。「源氏物語」であっても、だいたい五十四帖であれば五十四帖であつて、それが四十帖ぐらいであつたり、七十帖ぐらいの「源氏物語」などというのはありません。また、「源氏物語」は本もちゃんと決まつておりまして、いろいろな本でありまして、ほとんど全部同じような内容であります。最近、大沢本という本が出て、蜻蛉の巻が少し変わつてゐるというので、新聞でも大騒ぎをするぐらいであります（4）。

けれども、たとえば、「平家物語」になりますと、一番最初が三巻、それがいつのまにか六巻ぐらいになつて、それから十二巻になります。今我々が普通に読む「平家物語」というのは、十二巻本でありますが、それがさらに二十巻になつて、長

門本という本になります。それがまたさらに大きくなつていき、四十八巻の「源平盛衰記」という本になつていくというような作品もあります。どうしてそういうことになるのかというと、非常に価値が高いと思うような作品というのは変わることはありませんけれども、それ程価値がない、と言つては悪いかもしれませんが、それほど価値が高くないと思われるようなものは、いろいろに書き換えていく、それが日本の文学の一つのあたりであるわけです。

そして「枕草子」は、どちらかというと「平家物語」みたいな感じになつております。

次の引用は「枕草子・八二段」からの抜粋ですが、Aは「三巻本」、Bは「能因本」です。文学作品のテキストを他の本と合わせて、どこがどう違うかということを調べるのが、校本とか、校定というふうに申しますけれども、両者の違いを傍線部分で指摘しています。

A（三巻本）

「御名をば今は草の庵となむつけたる」とて急ぎ立ち給ひぬれば、「いとわろき名の、末の世まであらむこそ、くちをしかなれ」と言ふほどに、修理の亮則光、「いみじきよろこび申しになむ、うへにやとてまありたりつる」と言へば、「なんぞ。司召なども聞こえぬを。なにになり給へるぞ」と問へば、「いな、まことにいみじううれしきことよべ侍りしを、心もとなく思ひ明かしてなむ。かばかり面目あることなかりき」とて、はじめありけることども、中将の語り給ひつる同

じことを言ひて、『ただ、この返りごとにしたがひて、こかけをしふみし、すべて、さる者ありきとだに思はじ』と頭中將の給へば、ある限りかうようしてやり給ひしに、ただに來たりしはなかなかよかりき。持て來たりしたびはいかならむと胸つぶれて、まことにわるからむは、せうとのためにもわるかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず、そこらの人のほめ感じて、せうとこち來。これ聞けとの給ひしかば、下心地はいとうれしけれど、さやうの方に、さらにえさぶらふまじき身になむと申ししかば、こと加へよ聞き知れとにはあらず、ただ、人に語れとて聞かするぞとの給ひしになむ、すこしくちをしきせうとのおぼえに侍りしかども、本つけ試みるに、言ふべきやうなし。

B (能因本)

「御名は今草の庵となむつけたる」とて急ぎ立ち給ひぬれば、「いとわろき名の、末まであらむこそ、くちをしかるべけれ」と言ふほどに、修理亮則光、「いみじきよろこび申しに、うへにやとてまゐりたりつる」と言へば、「なぞ。司召ありとも聞こえぬに。なにになり給へるぞ」と言へば、「いで、まことにうれしきしきことよべ侍りしを、心もとなく思ひ明かしてなむ。かばかり面目あることなかりき」とて、はじめありけることも、中將の語りつる同じこともを言ひて、『この返りごとにしたがひて、さる者ありとだに思はじ』と頭中將の給ひしに、ただに來たりしはなかなかよかりき。持て來たりしたびはいかならむと胸つぶれて、まことにわる

からむは、せうとのためもわるかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず、そこらの人のほめ感じて、せうとこそ聞けとの給ひしかば、下心にはいとうれしけれど、さやうの方には、さらにえくふんすまじき身になむ侍ると申ししかば、こと加へ聞き知れとにはあらず、ただ、人に語れとて聞かするぞとの給ひしなむ、すこしくちをしきせうとのおぼえに侍りしかど、これが本つけ試みるに、言ふべきやうなし。

(「第八二段」(5)より抜粋)

点線の傍線を引いたところが、その本にはあるが、他の本には無いところです。二行目で言えば、三卷本では「いとわろき名の、末の世まで」とあるところが、能因本だと「いとわろき名の末まで」となります。波線の傍線を引いたところは、三卷本と能因本との異同です。三卷本の三行目の「くちをしかなれ」というところが、能因本では「くちをしかるべけれ」となっています。

さて、一番中心になるところを申し上げます。この文章は高等学校の教科書にもあったかと思いますが、この章段は「頭中將のすずろなるそらごとを聞いて」という文から始まります。頭中將という人が清少納言の間違った噂話を聞いて、それとつちめてやろうというので、漢詩の一部を彼女に送って、その返事をくれといったけれどもなかなか返さなかったというところです。

そうしたら、頭中將たちが怒って、使いの者にどうしても取り返してこいといったところ、それが、三卷本で「中將の語り

給ひつる同じことを言ひて」以下の部分なありますが、そこに、「ただ、この返りごとにしたがつて、こかけをしふみし、すべて、さる者ありきとだに思はじと頭の中將の給へば」というところがあります。この「こかけをしふみし」という言葉は実は現在でも分からない言葉なのです。今でも、どういう意味か分からない。ですから、このところを教室でお教えなつた方がおいででしたら、大変ご苦労なさつたところだと思ひます。ところが、能因本はそういうところは、全部ないのです。書いてないのです。難しいようなところは、省いているのです。そのように、内容が変えられているということは、「枕草子」というものが、そう高い価値をもっていなかったというふうにいえるのだらうと思うのです。

同じことが、次の段にも見えます。ここは、類聚的章段が並んでいるところでありまされども、お経のことも全然違ふような書き方をしております。

A (三卷本)

經は 法華經さらなり。普賢十願。千手經。隨求經。金剛般若。藥師經。仁王經の下卷。

B (能因本)

經は 法華經さらなり。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀大呪。千手陀羅尼。

(「第二〇九段」)

A (三卷本)

仏は 如意輪。千手、すべて六觀音。藥師仏。釈迦仏。弥勒。地藏。文殊。不動尊。普賢。

B (能因本)

仏は 如意輪は人の心を思しわづらひて頰杖つきておはする、世に知らずあはれにはづかし。千手、すべて六觀音。不動尊。藥師仏。釈迦。弥勒。普賢。地藏。文殊。

(「第二〇段」)

第二〇九段では三卷本で「普賢十願。千手經。」となっている順番が、能因本では逆になっています。また全然違ふお経の名前あつたりします。二一〇段でも同様です。

また第二一段を見ます。

A (三卷本)

書は 文集。文選。新賦。史記。五帝本紀。願文。表。博士の申文。

B (能因本)

書は 文集。文選。博士の申文。

(「第二一段」)

ここは、清少納言の文学的知識を説明する時によく引用され

るところですが、能因本の方は、「新賦。史記、五帝本紀。」等
というところは外しています。

それから、明らかに間違っていると思うのが第二一二段です。

A (三卷本)

物語は 住吉。宇津保。殿移り。国譲りはにくし。埋れ木。
月待つ女。梅壺の大將。道心すすむる。松が枝。こま野の物
語は、古蝙蝠探しいでて持て行きしがをかしきなり。ものう
らやみの中將、宰相に子生ませて、かたみの衣などこひたる
ぞにくき。交野の少將。

B (能因本)

物語は 住吉。宇津保の類。殿移り。月待つ女。交野の少將。
梅壺の少將。国譲り。埋れ木。道心すすむる。松が枝。こま
野の物語は、古き蝙蝠さしいでても往にしがをかしきなり。

(第二一二段)

三卷本を見ますと、まず「物語は住吉」、これは住吉物語。
次に「宇津保」、これは宇津保物語です。それから次の「殿移り」
というのは宇津保物語の中の巻の名前です。源氏物語でいえば、
「若紫」であるとか、「夕顔」であるというのにあたるのが「殿
移り」です。「国譲り」もそうです。「殿移り」の巻というのは、
今日の宇津保物語にはありませんが、もともと「蔵開」という
のが、別名「殿移り」となったのです。それからその次の「埋
れ木」というのは物語の名前です。「月待つ女」というのも物語で、

「月待つ女物語」のことです。

ところが、能因本を見ますと、「国譲り」が、「月待つ女」な
どの後ろに出てきています。月待つ女物語や梅壺の大(少)將
物語と並ぶ形で「国譲り物語」というふうになっています。宇
津保物語の中の巻の名前を、物語の名前として能因本は扱って
いるということになるわけです。このように、もともになるもの
がどんどん変えられていくというのが、「枕草子」の一つの
性質であるといえます。

そのために、「枕草子」の章段数も、本によって違いが出て
きています。

＊参考 三卷本—三四四段

能因本—三一段

前田本—三三五段

堀本—二九二段

これは、私が数えたのではなく、岸上慎二先生という「枕草
子」の有名な研究者が数えられたものです。三卷本は、全部で
三百四十四段ある。けれども同じ系統である能因本は三百十一
段ということですから、三十三段が省かれているということに
なります。それから、前田家本の方も三百三十五段ありますが、
それが同じ系統の堺本になると、四十数段も減らされている、
というふうには、結局、作品そのものが改変されているというこ
とは、少なくとも平安時代では、「枕草子」というのはそう高
い価値をもった作品ではなかったということになります。

六、「枕草子」の中世和歌への影響

しかし、「枕草子」の、特に第一段の「春はあけぼの。夏はよる。秋は夕暮。冬はつとめて」のところは、中世の和歌に影響を与えるところ大でありました。

新古今集で、藤原俊成は「またや見む交野のみ野の桜狩 花の雪散る春のあけぼの」と詠んでいます。永久四年百首の歌では―これは「春はあけぼの（春曙）」を題に作られた歌であります―、「山の端の横雲ばかり渡りつつ 緑に見ゆるあけぼのの空」としています。これは明かに「枕草子」の「春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。」という部分を翻案した歌だと考えることができます。このように中世の和歌への素材を与えています。

また新古今集には、西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり 鴨立つ沢の秋の夕暮」、藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮」、また寂蓮法師の「さびしさはその色としもなかりけり まき立つ山の秋の夕暮」という有名な歌がありますが、これらはいずれも最後が「秋の夕暮」という言葉で結ばれています。三夕（さんせき・さんゆう）の歌といって、新古今和歌集の中の一帯代表的な歌とされていますが、それらではともに「秋の夕暮」と結句させています。それは私としては、「枕草子」の「秋は夕暮」という言葉であったと思うのです。

さらにはそれに対する反発みたいな歌まであります。

見渡せば山もと霞む水無瀬川 夕べは秋となに思ひけむ

（「新古今集」 後鳥羽院）

見渡すと、山の麓が霞んでいる、ということですから、春です。同じ水蒸気でも、秋だと霧になります。霞といえば、春になります。春霞が、水無瀬川のあたりで、山のふもとに美しくかかっている。だから、その夕方は「秋となにを思ひけむ」、つまり、夕方は秋がいいのだとどうして思ったのだろう、春の夕方だってこんなにはいいのではないか、といっているのです。「秋は夕暮がよい」に対する反発の歌であると考えていいのではないかと思います。

似たような歌としましては、同じ新古今集の中に、上の句が「薄霧のまがきの花の朝じめり」というのがあります。霧がかかって、垣根のところにある花の「朝じめり」ですから、朝、露がおりて湿っている。そしてそれに続けて下の句に「秋は夕べとたれかいひけむ」とあります。「秋は夕方がいい」と誰が言ったのだろう。それは清少納言ではないかということになるのですけれども、そういうふうには、明らかに「枕草子」のこの部分に対して歌を作るということが、中世で行われたということに繋がっていると思います。

このように「枕草子」という作品は、平安時代には、あまり価値が認められておりませんが、中世になりますと部分的に価値が認められる。その価値をはつきりと認めたのが、一三三〇年ぐらいに吉田兼好が書きました「徒然草」です。これは、明

らかに「枕草子」を模倣しているというか、それを範にとって書いている作品といえます。

ですから、「枕草子」というものは、不思議な、作品そのものも不思議な作品ですけども、その運命と申しますか、その価値が、ずっと後になって見出されるようになった作品であるということがいえるのではないかと思います。

結

大変偉そうな顔して、あまりお役に立たないような講演で申し訳ありません。これで、終らせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

（司会）木越先生、ありがとうございました。「枕草子」に関する貴重で興味深く、面白い話を聞かせていただきました。

では、青木先生から、一言謝辞をいただきたいと思っています。お願いします。

（青木先生）木越先生どうもありがとうございました。「枕草子」の性格ということで、お話いただきました。私なども今まで全然、そんなことを考えていなかったというように、清少納言をはじめとして、平安時代の文学の中で、漢詩、漢文に関する教養などが随所に出てくるようなところは、木越先生の真骨頂ということであろうかなとお伺いしていました。

平安時代の文学、日記文学、物語文学を視野に入れて、その中で「枕草子」が、日記や文学や和歌とは違うようなところを目指して作られたものであるというところは、私などは全然考えたこともありませんでしたので、非常に新鮮に伺いました。

木越先生は、前に薄井先生からもご紹介があったと思いますが、十二年ぐらい前、定年でご退官されて、久しぶりにお声を伺いました。大変、ご自分のお話になると、声も大きくなっていらつしやって、大変お元気そうで安心しております。ただ、ご健康の方も血圧が高いということを事前にお伺いしましたが、どうぞお体に気を付けられて、これからご活躍されますように、お祈りいたします。どうもありがとうございました。

(司会) では、これにて木越先生の講演会を終わらせていただきますと思います。最後に、今一度大きな拍手で送りください。

注

(1) 「枕草子」の引用は特に注記した場合以外は三巻本の『日本古典文学大系 19』(岩波書店)の本による。章段分けも同じ。また章段数のみを記したのはいずれも「枕草子」からの引用である。

(2) 『新日本古典文学大系 25 枕草子』(岩波書店)の解説。『岩波セミナーブックス 古典講読シリーズ 枕草子』(岩波書店)。

(3) 渡辺実氏は、(2)において、この「文」は「手紙」ではなく、「メモ」のような文書とされている。

(4) 朝日新聞・平成二十一年十一月二日の朝刊。

(5) 『新校本枕草子』根来司(笠間書院)による。ただし章段は(1)に従う。